

ぶんきんニュース

日本分析化学会近畿支部ニュース 第3号

2006年4月1日

今年度より垣内前支部長の後を引き継いで近畿支部長を仰せつかりました大阪市立大学大学院理学研究科の市村です。ご承知のように近畿支部では、これまでの支部長をはじめとする支部役員および支部会員の皆様方のご尽力により、機器分析化学講習会および基礎分析化学講習会を始とする支部事業の着実な実施や財政基盤の改善が行われてきました。特に昨年度からは新たな事業として、近畿分析技術研究国際交流助成および近畿分析技術研究奨励賞が実施され、その報告等をこの「ぶんきんニュース」で楽しく読まれることと存じます。



私が大学院生のとき、近畿大学で開催された機器分析化学講習会で電気分析のアルバイトの手伝いをしたのが、近畿支部へのかかわりのはじめです。この講習会も半世紀を超え今年で53回を迎え伝統的な事業ですが、機器分析メーカー主催の講習会とは異なり、受講生が満足して修了されるよう特色のある企画となっています。また数年前から始まった基礎分析化学講習会も、この「ぶんきんニュース」で案内されているように「分析化学の基礎の基礎」をテーマにし、受講希望者の年々増加の傾向で支部事業として定着しつつあります。

これら二大事業だけでなく新事業を含め支部活動がますます活性化してきています。今年度もこの方向に沿って展開していくつもりです。また新たな事業として「若手セミナー」を今年度中に発足できたかと思っています。さらに、今年度の分析化学会55年会は渡會実行委員長のもと近畿支部の世話で阪大理学部で開催されます。当地近畿支部会員の積極的な参加をお願いする次第です。

今後とも会員の皆様にとってより有意義な支部活動を、皆様方のご協力を得て展開していきたいと考えています。

2006年4月1日

日本分析化学会近畿支部

支部長 市村彰男

目次

・ 新支部長からご挨拶	-----	p.1
・ 行事予定	-----	p.2
・ 報告：	-----	p.6
➤ 第1回近畿分析技術研究奨励賞 表彰式		
➤ 第2回支部講演会		
➤ 近畿分析技術研究懇話会第9回講演会		
➤ 提案公募型セミナー		
➤ 2005年度近畿分析技術研究国際交流助成者から		
・ お知らせ	-----	p.11

行事予定

①第1回支部講演会（4/14）in 大阪科技セ

日時：4月14日（金）午後3時～5時

場所：大阪科学技術センター8階小ホール

講演：

寺部 茂先生（兵庫県大院理） 「キャピラリー電気泳動研究の四半世紀」

田中 稔先生（阪大環境安全研究管理セ）

「クロマトグラフィーー熱分解GCから環境分析ー」

詳細は以下のホームページをご覧ください

<http://www.bunkin.org/2006/event/180414shibu1.html>

② 第3回基礎分析化学講習会（6/23）in 大阪市大

最近の科学技術の進歩は著しく、分析化学においても先端技術の習得は不可欠となっています。一方、日常業務において信頼性の高いデータを得るには、分析操作に対する正確な理解が必要です。したがって、今日の分析化学技術者は、基礎から最先端まで極めて幅広い知識・技術の習得を要求され、このため、基礎的知識が不十分なまま業務を余儀なくされているとのお話もお聞きします。

日本分析化学会近畿支部は、このような問題の解決を支援するため、毎年「基礎分析化学講習会」を開催しています。

今回も分析化学「基礎の基礎」習得を目標とした講習会を行いますので、ふるってご参加下さい。データの平均値・標準偏差の意味、ピペット等の基本操作法から微量分析の勘どころ、pH測定や原子スペクトル分析法の基礎まで、分析ビギナーの方々に是非知っていただきたい内容を専門の講師に解説していただきます。

下に実施内容を記載しましたが、定員50名となっていますのでお早めにお申し込み下さい。

さらに近畿支部では初心者向けの実験・実習として基礎実習（定員10名程度）も行っています。こちらは「新しい分野に挑戦したいが最初の一步が分からない」といった方に最適なコースで、昨年度も大好評でした。今年度も3回程度の開催を予定しており、内容が決まり次第、順次ご案内いたしますので今しばらくお待ち下さい。



主催 日本分析化学会近畿支部・近畿分析技術研究懇話会

協賛 近畿化学協会・日本化学会近畿支部

期日 6月23日（金）午前9時30分～午後5時

会場 大阪市立大学学術情報総合センター1F文化交流室（大阪市住吉区杉本 3-3-138；アクセス、www.osaka-cu.ac.jp-access.html；キャンパスマップ、www.osaka-cu.ac.jp-campusmap.html）

プログラム

- 1) 平均値, 標準偏差から何が分かるか-分析化学データの統計処理と検定 (9:30-11:00) (兵庫教育大) 尾関 徹
- 2) 基本的器具の原理と取り扱い方-ピペット, メスフラスコ, 電子天秤 (11:10-12:10) (甲南大学) 茶山健二
- 3) トレース分析のための器具, 容器の取り扱い方-材質の選択, 洗浄法, 保管等 (13:15-14:15) (阪大環境安全セ) 矢坂裕太
- 4) pH を正確に測定するために (14:15-15:15) (堀場製作所) 西尾友志
- 5) 原子スペクトル分析法の基礎 (15:30-16:30) (阪市工研) 河野宏彰
- 6) 質疑応答 (16:30-17:00)

参加費 5,000 円 (近畿分析技術研究懇話会賛助会員は無料)

申込締切 5月19日 [定員(50名)に達し次第締切]

申込方法 「基礎分析化学講習会申込書」と題記し, (1) 氏名(ふりがな), 勤務先, 所属; (2) 連絡先(郵便番号, 所在地, 電話, FAX, E-mail); (3) 賛助会員の有無; (4) 参加費送金予定日を記入の上, 下記宛にFAX又はE-mailでお申し込み下さい。送金は6月13日までに, りそな銀行御堂筋支店, 普通預金No.2340726, 名義 社団法人日本分析化学会近畿支部(振込手数料は貴方でご負担下さい)へお振り込み下さい。なお, 参加を棄権されても, お振り込み頂いた参加費は返金できませんので予めご了承下さい。

申込先 〒550-0004 大阪市西区靱本町 1-8-4 大阪科学技術センター6F 社団法人 日本分析化学会近畿支部 [電話(06)6441-5531, FAX (06)6443-6685, E-mail: mail@bunkin.org]

問合せ先 〒599-8570 堺市学園町1-2 大阪府立大学産学官連携機構先端科学イノベーションセンター, 世話人 長岡 勉, 電話とFAX(072)254-9821, E-mail: nagaoka@riast.osakafu-u.ac.jp

③ 第53回機器による分析化学講習会 (7/20-21) in 大工大

下記の要領で開催予定です。奮ってご参加下さい。

主催: 日本分析化学会近畿支部・近畿分析技術研究懇話会

協賛: 大阪工業大学・関西分析研究会・環境分析技術協議会・近畿化学協会・日本化学会近畿支部・日本農芸化学会関西支部・日本薬学会近畿支部・日本臨床化学会近畿支部・X線分析研究懇話会・ESCA研究会・

ESCA分析研究会・電気泳動分析研究懇談会

期日 7月20日(木)・21日(金)

会場 大阪工業大学インキュベーションラボ、工学部応用化学科311,312学生実験室〔大阪市旭区大宮5-16-1,交通:京阪電車「千林」駅(普通のみ停車)から北西へ徒歩約20分。地下鉄谷町線「東梅田」駅から大日行きで「千林大宮」駅下車、北西へ徒歩約15分。JR大阪駅から:幹34号守口車庫行きバス(約20分)に乗車「中宮(大阪工大前)」停留所下車すぐ〕。

スケジュール

	実習	昼休み	見学会*	実習	ミキサー
7月20日(木)	9:30~12:20	12:20~13:00	13:00~13:20	13:30~16:20	16:30~17:20
7月21日(金)	9:30~12:20	12:20~13:00	13:00~13:20	13:30~16:20	

*見学会: 希望者はこの時間帯に他科目の機器見学

[実習内容]

1. 高速液体クロマトグラフィー(定員：6名)

科目主任:(京工繊大)細矢 憲・副科目主任:(京工繊大)池上 亨

逆相高速液体クロマトグラフィーにおける基礎的な分離・検出法、および最新の分析方法。最近よく使用されている小さな粒子、小さなカラムにおける真の性能の発現、ならびに、モノリス型シリカカラムの特徴と特性の利用について実習を行い、理解を深める。

(1) 逆相 HPLC 分析の基礎と実際

[移動相組成が分離に与える影響—有機溶媒比率と pH] (京工繊大)細矢 憲・[島津製作所]

(2) 逆相 HPLC 分析の基礎と実際[高圧グラジエント-蛍光検出を用いる多環芳香族化合物の分離分析] (京工繊大)細矢 憲・[島津製作所]

(3) 超高速液体クロマトグラフィーの基礎と実際

[2 ミクロン以下の微小粒子充填カラムを用いる超高速液体クロマトグラフィーの特長と基本性能についての解説と測定実習] (京工繊大) 細矢 憲・[日本分光]

(4) バンド拡がり基礎

[短いカラム(1-5 cm長)の真の性能の発現について]

(京工繊大)池上 亨・[メルクジャパン]

(5) モノリスカラム[モノリス型シリカカラムと粒子充填型カラムの性能と高速性、分離特性における比較] (京工繊大)池上 亨・[メルクジャパン]

(6) HPLC の基礎についての講習

2. キャピラリー/マイクロチップ電気泳動 (定員：6名)

科目主任：(産総研) 竹田さほり・副科目主任：(京大院工) 大塚浩二

高分離能分析法として定着しつつあるキャピラリー電気泳動 (CE)、及び次世代の高性能迅速分離分析法として脚光を浴びているマイクロチップ電気泳動 (MCE) について、最新の機器を使用した実習を行い、各分析法に対する理解を深める。

(1) CE の基礎

[概要・基礎理論と分析例] (産総研) 竹田さほり・[大塚電子]

(2) CE の実際

[製薬/製剤分析への応用、光学異性体・抗体医薬品・合成薬物の試験を踏まえて] (産総研) 竹田さほり・[ベックマン・コールター]

(3) MCE の基礎 [各種分離モードと分析例] (京大院工) 大塚浩二

3. 質量分析法 (GC-MS、LC-MS) (定員：10名)

科目主任：(阪大環境安全研究管理セ) 角井伸次・科目副主任：(JCLバイオアッセイ) 井上則子

質量分析法の最大の利点は、極微量の試料を迅速に測定することが可能な点にある。その特徴を生かしたGC-MSおよびLC-MSの定量分析の基礎と応用について学習し、最新の機器を用いた実習を行い、理解を深める。

(1) GC-MS の基礎

[GC-MSを用いて、信頼性の高い定性分析と高感度定量分析の実際を体験し、その有用性を理解する。] (阪大環境安全研究管理セ) 角井伸次・[島津製作所]

(2) LC-MS による定量分析の基礎

[LC-MSを用いてどのように定量するのかを理解するとともに、定量解析における利点、留意点について学ぶ。また高感度分析法を確立するための手法について学習する。] (JCLバイオアッセイ) 井上則子・[アプライドバイオシステムズジャパン]

4. 原子スペクトル分析・前処理法含む(定員：12名)

科目主任：(阪市工研)河野宏彰・科目副主任：(神大発達科学)齋藤恵逸、(大阪薬大)山口敬子

環境試料や工業材料試料など多くの試料中に含まれる微量元素定量法として汎用されている原子スペクトル分析法のうち原子発光法(ICP-AES)と原子吸光法(GFAAS, HGAAS)について、また、試料調製法としてマイクロ波試料分解法についての基礎と応用について学習し、最新の機器を用いた実習を行い、理解を深める。

(1)マイクロ波試料分解法による測定試料溶液の調製

[マイクロ波試料分解装置によりプラスチックなどの難分解性試料を湿式灰化し、原子スペクトル分析用の測定試料を調製する] (阪市工研)河野宏彰・[マイルストーン・ゼネラル]

(2)グラファイトファーネス原子吸光法による環境水中の鉛の定量

[GFAAS でのマトリックスモディファイヤの添加効果を利用して、環境水やプラスチック中の微量の鉛を測定する] (神大発達科学)齋藤恵逸・[日立サイエンスシステムズ]

(3)水素化物発生原子吸光法による環境試料中のヒ素の定量 [HGAAS を用いて、環境試料中に含まれる微量ヒ素を測定する] (神大発達科学)齋藤恵逸・[日立サイエンスシステムズ]

(4)ICP 発光分析法による微量元素の定量

[半導体受光素子型軸方向測光 ICP-AES を用いて、プラスチック材料中に含まれる微量元素を測定する] (阪市工研)河野宏彰・[サーモエレクトロン]

5. X線光電子分光 (ESCA) による表面分析 (定員：6名)

科目主任：文珠四郎秀昭 (阪大院理)・科目副主任：石井秀司 (京大院工)

X線光電子分光法 (ESCA, XPS) による固体表面の分析について、最新の装置を用いた実習を行い、測定原理、試料の取り扱い、定量、状態分析や深さ方向分析について学習する。さらに得られたスペクトルの処理と解析法についても理解を深める。受講生の持込みサンプルの分析希望にも対応する予定である。

備考

* 1名一科目の参加とします。第1希望が定員に達した(科目によっては若干余裕があります)場合、別科目を希望される方は第2希望をご記入下さい。

* 科目によっては科目内容がいくらか異なることもあります。

* 実習項目は科目ごとに実施します。

* 受講者には、受講証明書を発行します。

参加費 非会員:40,000円, 主催団体&協賛団体会員:35,000円, 学生:16,000円(含む消費税、テキスト代)

申込方法 用紙に1)氏名、2)勤務先(所属)、3)連絡先(住所・郵便・電話・FAX,E-Mail)、4)受講科目(第1,第2希望)、5)実習科目の経験の有無、経験年数、6)最終学歴を明記し、参加費{銀行振込(りそな銀行御堂筋支店普通預金No.2340726、名義社団法人日本分析化学会近畿支部)}を添えて下記へお申し込み下さい。定員に達ししだい申込みを締め切らせて頂きます。ホームページ:<http://www.bunkin.org/>

申込先 〒550-0004 大阪市西区鞠本町 1-8-4 大阪科学技術センター6F 日本分析化学会近畿支部 [電話:06-6441-5531,FAX:06-6443-6685,E-mail:mail@bunkin.org]

報告：第1回近畿分析技術研究奨励賞

表彰式が執り行われました

2006年1月13日、大阪科学技術センターにて、第1回近畿分析技術研究奨励賞の表彰式と受賞講演会が行われました。第1回の受賞者は、関西学院大学の池羽田晶文氏と京都電子工業株式会社の倉内奈美氏でした。会場には近畿支部役員をはじめとして、多数の支部会員や学生が駆けつけてほぼ満席となりました。

表彰式では、選考委員長の中原武利先生より講評が述べられた後、垣内隆支部長より受賞者に賞状と記念の楯が贈呈されました。楯は大阪造幣局製で、漆黒のプレートに銅製のメダルをあつらえたものです。つづいて、垣内支部長より、奨励賞制定の経緯と受賞者への祝辞が述べられました。表彰式につづいて、受賞講演が行われ、池羽田氏は、「表面プラズモン共鳴近赤外分光法の確立」と題して、全反射配置でのSPR測定と近赤外分光を結合するための装置を開発し、微量・高感度分析への応用について、講演されました。倉内氏は「液体比熱計の研究開発」と題して、断熱系での熱量測定によらない簡便で迅速な比熱測定計の開発の成果について講演されました。いずれの講演後も、受賞講演では質疑は行わないという慣例を破って、近畿支部らしく大変熱のこもった討論が行われたのが印象的でした。



つづいて、懇親会が中原先生の乾杯の発声で始まり、受賞者を囲んでの談笑や記念撮影、記念楯の披露などにぎやかなひと時となりました。最後に、次期支部長の市村彰男先生より、奨励賞制定を機に近畿支部の一層の発展を祈念する旨の挨拶があり、お開きとなりました。池羽田さん、倉内さん、本当におめでとうございます。

会員の皆さまには、2006年度もぜひ多数のご応募、ご推薦をお願いいたします。 (庶務 前田)

報告：第2回支部講演会

2005年12月9日大阪科学技術センターにて、「新しい分光分析法」をテーマとして以下の2名の講師を迎えて開催された。

1. テラヘルツ時間領域分光法による分光・計測

阪大レーザーエネルギー研究センター 谷 正彦 氏

2. 近赤外分光法の発展

和歌山県農林水産総合技術センター 宮本久美 氏

テラヘルツ分光と近赤外分光は最近ともに基礎研究面でも応用面でも注目されている分光法である。分析化学分野でも活発に用いられている。テラヘルツ波とは周波数でいうと100GHzから10THzにあた

る光と電波の中間に位置する領域である。一方、近赤外光は赤外光の中で可視域に一番“近い”領域、波長で言うと 750-2500 nm の領域にあたる。

谷正彦氏はテラヘルツ波とは何かということから話をはじめ、テラヘルツ分光の特長、測定システムの開発、さらにはさまざまな応用について解説した。応用としては、たとえばテラヘルツイメージングを非破壊検査手段として用いること、医薬品検査への応用、タンパク質などの生体分子の構造やゆらぎの研究などが紹介された。

宮本久美氏は前半部で倍音・結合音、非調和性のことなど近赤外分光法の原理の説明、近赤外分光法の歴史、特色などについて講演した。後半部では、近赤外分光法の応用、特に宮本氏の専門の農業分野への応用を中心に興味深い応用例が数多く紹介された。 (副支部長 尾崎)

報 告： 近畿分析技術研究懇話会第9回講演会

2006年3月10日大阪科学技術センターにて、「ナノサイエンス・ナノテクノロジー」をテーマとして以下の2名の講師を迎えて開催された。

1. 空間・時間分解分光法の最近の進歩 (15時~16時)

関西学院大学理工学部 玉井尚登 氏

2. ナノマイクロ加工の現状と展開 (16時~17時)

兵庫県立大学高度産業科学技術研究所 服部 正氏

玉井尚登氏の講演は、パルスレーザーを利用したレーザー分光を用い超短時間・微小領域における分光測定を行い、新しい化学の扉を開くというものであった。時間分解走査プローブ顕微鏡や時間分解走査型ニアフィールド顕微分光 (SNOM) を応用し、物質の界面層や微小領域に閉じ込められた反応系の光化学反応や励起エネルギー緩和などについてご講演いただいた。

服部 正氏は、放射光 (SR)-LIGA による超微細 3次元加工技術の開発、SR-MEMS による光学・電子デバイスの開発などについて豊富な実例を挙げて報告した。この LIGA というのは現在の機械加工技術では到達できないマイクロメートルレベルの微細加工が量産可能なプロセス技術である。SR ならではのナノマイクロ加工に関する興味深い研究例がたくさん紹介された。 (副支部長 尾崎)

報 告： 提案公募型セミナー

「分析化学と学会のあり方を考える熟年研究者の集い」

標記のセミナーが、3月4日(土)午後2時から5時30分まで、京都工芸繊維大学で開催された。参加者は、近畿の大学から12名、企業から3名、中四国支部の企業から1名、オブザーバー3名(大学2名、企業1名)、学生9名であった。

セミナーの趣旨 日本分析化学会のみならず多くの学会では、若手の会合を奨励し、頻繁に開催している。また、これらの会合は、若手の交流、知識の集積、研究内容に関する討議の場としては大いに実を上げている。しかし、学問や学会の将来像が若手によって十分議論され、議論の結果が学問分野や学会全体に反映されているとは言い難い。一方、現在の分析化学界に対して責任があり、実行力も有すると

考えられる熟年研究者も、個々には学問や学会の将来像を描いていても、それを討議によって検証し、実行に移す努力をしているとは考え難い。そこで、産官学で責任ある立場に居られる熟年研究者が一堂に集い、分析化学や学会のあり方を率直かつ真剣・真摯に議論してみたいと考え、本会合を企画した。(なお、熟年とはほぼ 50 歳以上とした。)

セミナーの経過 出席者の自己紹介の後、司会者から、次のような分析化学と学会の現状に対する問題が提起された。①大学の分析化学研究室の減少とその原因。減少に伴う、後継者の量と領域および後継者育成システムの問題。②分析機器製造企業、分析サービス企業、分析を必要とする部署が分析出身者を採用せず、環境関連、分析サービス企業の日本分析化学会への関心が薄い現状。③日本の分析化学の世界、アジアに果たす役割の低下、など。

その後、参加者全員の発言を得て、活発な本音での討論が行われた。議論の内容をキーワードで示すと、大学の分析化学の現状、大型予算と分析化学(なぜ、分析関係者にあたらないのか)、実分析と分析化学、分析化学的研究の評価、化学の中の分析化学、他分野から分析化学が見えない、企業の要求する分析化学と分析技術、企業の分析業務が必要とする人材、分析機器メーカーの必要とする人材、分析化学教育の現状と問題点、企業関係者から見た日本分析化学会、次世代の分析化学(科学)を支える学会活動、日本発の国際会議の一人歩き、中国、韓国、台湾などの伸張と日本の分析化学、学会の関わり方、などであった。その詳細は、日本分析化学会近畿支部ホームページ(<http://www.bunkin.org/index.html>)の事業予定のページに詳しい議事録が掲載してあるので、是非ご覧願いたい。

セミナー終了後、オブザーバーやセミナーの準備を手伝い、セミナーを傍聴した学生も参加して、懇親会が開かれた。ここでは、さらに議論が沸騰し、このような会は結論を導くものではないが、継続した開催が必要との意見が多数出た。また、学生諸氏からは、いつも接している指導教官だけでなく、熟年集団の本音を聞けて、大いに参考になったとの感想も述べられた。

最後に、本セミナーの運営および記録にご助力いただいた、近畿支部常任幹事に感謝します。

(京都工繊大 木原)

報 告 : 2005 年度近畿分析技術研究国際交流助成者から

助成を受けた 5 名の方々から戴いた出張報告を掲載します。

○今倉精一君(京大・工・M2) 環太平洋国際化学会議 (PACIFICHEM 2005) 米国・ハワイ 2005.12.15 ~20

日本で寒空が広がるなか、温暖な気候のハワイで行われた PACIFICHEM 2005 に参加してきた。私にとってはこれまで経験の少ない国際会議ということで、不安と期待が入り混じった。もちろん、英語に対する不安はあったが、日本の学会ではできない経験をすることができるのかと思うと、期待に胸が膨らみ、世界の研究者との出会いを楽しみにして学会に向かうことができた。この会議は日本とアメリカを中心として、様々な国から多くの研究者が参加しており、非常に大きな規模の学会である。日本から大勢の研究者が参加し、学会会場もさることながら街中で知人にすれ違うことも多かった。ワイキキの中心にあるシェラトンホテルでオープニングセレモニーが開かれ、現地の方が踊りを披露してくださり、その後カーボンナノチューブを発見された飯島澄男先生の特別講演が行われた。特別講演の中では、日本の金閣寺の写真が現れる場面もあった。日本の文化をどれほど海外の人が存じているのかは分からないが、日本の文化を知ってもらおうきっかけになると思うので、素晴らしい試みだと感じた。

発表会場は、ワイキキにあるいくつかのホテルに、分散されていたので、移動に苦勞することとなり気軽に他分野の発表を聞くことは難しかった。しかし、自分の興味ある分野の発表時間を把握し、計画的に動くことによって注目していた発表を聞くことができた。私はイリカイホテルでポスター発表を12月18日の午後8時から行った。非常に広い会場でポスター発表は行われ、学生を中心として多くの発表が行われた。ポスター発表には多くの方が質問に来られて、議論も活発に行うことができ、意義ある発表になったと思う。海外の方に発表を聞いてもらう機会もあり、国際学会ならではの交流をすることもできてよかった。この国際学会での経験を生かして、研究に邁進して行きたいと思う所存です。



○倉橋健介君(京大・理・D3) PACIFICHEM 2005 米国・ハワイ 2005.12.15~20

第1期近畿分析技術研究国際交流助成に採用され、ハワイのホノルルで開催された「PACIFICHEM 2005」に参加してきました。12月15日、指導教官である梅谷重夫助教授、同じ研究室の学生である田口雄亮君と共に日本を発ち、現地時間同日8時頃にホノルルに到着しました。宿泊地は発表会場に近いホノルル市内のHotel Waikiki Beachcomberでした。翌日、田口君がStudent Poster Competitionに参加するため、会場となるHotel Sheraton Waikikiへ向かいました。会場ではインプリント法により有機分子の分離を試みたMakoto Nomachi氏らの発表、カリックスアレーンを中心に価数の異なるFeイオンを同時に有する錯体を合成したTakashi Kajiwara氏の報告等、興味深い発表を数多く聞くことが出来ました。同日夕方、大阪大学の渡會仁教授の呼び掛けで開かれたSymposium Mixerに参加しました。同じSymposiumに参加される多くの方々が参加され、交流を深めることが出来ました。

17日、Symposium “Advance in Nanochemistry at Liquid Interface”のPoster Sessionで発表するために会場であるRenaissance Ilikai Waikiki Hotelへ向かいました。発表は20時から2時間ほど行われたため、ポスター近くに常駐し、幾つかの質疑応答や意見交換を行い、抽出の機構やZnとCdの分離の意義等について幾つかの指摘を受けました。他の参加者のポスターも見ることができ、とても有意義なSessionでした。今回の会議は私にとって初めての海外の国際会議であり、色々と慣れない点も多いものでしたが、会場で多くの英語での口頭発表、質疑応答に接し、触発され、同時に将来の研究のヒントを得ることができ、とても有意義なものであったと思います。一方、自身の英語力の不足も改めて思い知り、語学の勉強の必要性を痛感しました。今回の会議で得られたことが少しでも今後の研究に生かせるよう、今後とも頑張っていきたいと思っています。

最後になりますが、今回の会議に行くにあたりお世話になった方々、特に慣れない海外旅行中色々のご指導頂いた梅谷重夫助教授と、交流助成により貴重な交流と経験の機会を与えて頂いた日本分析化学会近畿支部に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

○朝井知子さん(甲南大・理・M1) MSB'2006 (20th International Symposium on Microscale Bioseparations) オランダ・アムステルダム 2006.1.22~26

本学会の多くはポスターによる発表であり、Fundamentals、Proteomics、Stationary Phases、Pharmaceutical Analysis、Clinical Diagnostics、Biomarker Discovery、Biopolymer Analysis、Single Cell Analysis、Hyphenation Techniques、Microfluidics、Novel Instrumentation、Metabolomicsの12の分野に大別され、報告が行なわれた。大半の発表がメタボローム解析やDNAなどの生体関連の研究、マイクロチップの開発などであったため、参加者の関心の多くもその方向に向いていたと考えられる。以下には、私の発表のSession Timeとの様子と、発表を見て私が感じたことについて報告する。

本発表は、Fundamentalsの分野で行なった。日本における温泉水の分析の現状と課題を取り上げ、キャピラリー電気泳動法における温泉水分析の可能性と最新の成果を報告した。しかし、海外の人々の温

泉に対する関心は薄く、議論を深めることはなかった。ところが、本研究で行なっているような幅広い濃度範囲の成分を含んだ試料中における微量成分の測定は、高濃度成分の妨害を受けるため難しく、様々な分野で研究されているため、本発表における分離手法に興味を示す人がいた。議論を行なう中で、高濃度成分の妨害を防ぐための工夫について、さらに研究を深めなければならないと感じた。

他のポスター発表においては、マイクロチップの研究報告が多く見られ、今後、我々が本研究を発展させ、更なる迅速化を図るときに、参考になることを多く得ることができた。生体関連については、自分自身、深い知識を持っていなかったのわからないことも多かったが、興味深い研究成果が数多く報告されていたと思う。

今回、このような素晴らしい機会を与えていただかなければ、国際学会という大きな場で発表するということはなかったと思う。貴重な経験をさせていただいた日本分析化学会近畿支部の方々に深く感謝すると共に、今後、更なる研究を続け、より良い成果を挙げたいと考えている。

○児玉谷 仁君（神戸大・総人科学・D3） PACIFICHEM 2005 米国・ハワイ 2005.12.15～20

米国ハワイ州ホノルル市で行われ PACIFICHEM2005 に参加し、ポスター発表を行ってきました。初の海外という緊張感、学会に対する期待感、英語力のなさからくる不安感、またハワイに対する興奮やらなんやらで前日に高熱を出し、危うく不参加となるどころでしたが、なんとか熱も下がりインフルエンザでもないと言われお墨付きを頂き参加することができました。



環太平洋国際化学会議はその名の通り非常に規模の大きな国際会議です。街中では大きなポスターケースを背負った人が多々見られ、観光に来られている人達からすると何事かと思われたことでしょう。私の発表は12月16日に行われた分析化学一般ポスターのセッションで行いました。英語で話しかけられたら・・・聞き取れなかったら・・・とかなり緊張していましたが、結局、最後まで日本語のみで、ホッとした感と残念だと思いが入り混じった複雑な気分でした。しかし、様々な分野の方々と議論することができ、アドバイスを頂き自分にとって非常に意義のある発表となりました。また滞在期間中、普段あまり聞く機会の無い分野の発表を聞くことができ、自分の知識の無さを痛感しつつ、新たな興味も生まれ、もっと広い視野を持って研究を進めていくことの必要性を感じました。

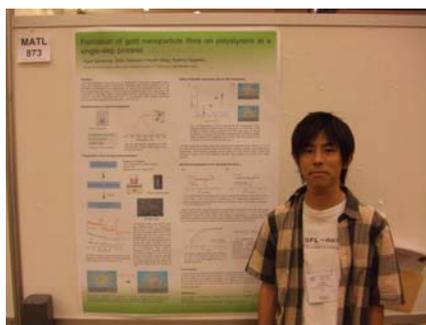


日程の都合上、滞在日数は2日とハワイを十分に満喫することはできませんでしたが、海外での国際会議を経験して、様々な刺激を受けることが出来ました。今回の経験を糧にして、今後の研究活動を精進していきたいと思えます。このような機会を与えてくださった指導教官である齊藤恵逸教授およびご援助頂いた日本分析化学会近畿支部の諸先生方に深く感謝致します。

○山本陽二郎君（大阪府大・工・D2） PACIFICHEM 2005 米国・ハワイ 2005.12.15～20

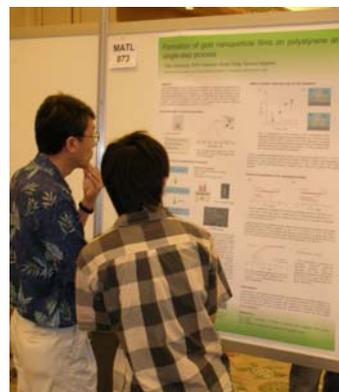
PACIFICHEM 2005 への参加は、自分自身にとって2回目の国際会議への参加となりました。語学力に不安を抱えたまま相変わらず緊張して関空を飛び立ちましたが、開催地のホノルルに到着して上着を脱いだとたん緊張がほぐれたような気がしました。

私のポスター発表までには日程に余裕があったので、会場であるシェラトンホテルと同じ研究室の他の発表者のポスターの見学や口頭発表などを聴くためにヒルトンホテルやイリカイホテルを行ったりきたりすることが日課となりました。



会議場での雰囲気や発表の流れなど、その場でしか味わうことのできないことを多く吸収できたことは、大きな収穫だったと感じています。また会議以外でも、ネイティブとの交流もとても貴重な経験でした。本場の英語に触れたことが少ない自分にとって、自らのポスター発表において英語でコミュニケーションするにはまだまだ表現力が足りないことを実感しました。しかし、私のつたない英語力にも関わらず聞きに来てくれた人たちは必死に理解し、肝心な目的

である研究成果の発表は達成させていただいたと思っています。また、今後の研究遂行に関する有益な意見交換、情報収集をすることができ、日本の学会とは一味違った収穫がありました。次回、国際会議に参加するときは英語の勉強はもちろんですが、もっと自分から積極的に話しかけることを心がけ、自分の発表をさらにアピールするといったことを目標にしたいと思いました。最後になりましたが、このような素晴らしい機会をいただきました、日本分析化学会近畿支部の方々に深く感謝いたします。



お知らせ

第6回(新旧)常任幹事会議事録

1月13日(金)に第6回常任幹事会が開催されました。議事録は支部ホームページ (<http://www.bunkin.org/giji-roku.html>)にて公開中ですのでご覧ください。

第1回幹事会が開催されます

4月14日(金)午後1時に2006年度第1回幹事会が大阪科学技術センター8階小ホール開催されます。幹事の皆様、ご出席のほどよろしく申し上げます。

会員拡充キャンペーン中



日本分析化学会は、現在、会員拡充キャンペーン「10,000名の生き生き学会に育てよう！」をおこなっています。期間は、2006年7月末までで、これまでに入会されると、(1)入会金免除、(2)紹介者には「紹介者獲得ポイント」が2倍、(3)支部には、年会費の10%相当額を還元、というインセンティブが与えられています。会員拡充にご協力をお願いします。

あとがき：4月から広報(HP/ぶんきんニュース)担当幹事が変わりました。まだまだ読みづらい構成かと思います。皆様のご意見・ご要望をお聞かせ下さい。(T.S)